
黒く在り続ける夢

裏門 志希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒く在り続ける夢

【Nコード】

N3102W

【作者名】

裏門 志希

【あらすじ】

小さい頃からずっと疑問だった。何故自分だけこんなんなのか。

主人公の明季はある問題に悩まされていた。高校生になって初めて医師の診断を受ける。すると、やはりとんでもない結果に…。前例のない症状である、と医師は告げる。まあ、それもそのはず。

…明季を悩ませる問題とは？

といった調子で始まるある私立高校生たちの物語です。

序章（前書き）

初めましてです。

実はこれが僕の初めての作品です。至らない点、それはもうたくさんあると思いますが、ぜひとも宜しく願います。

掲載のペースも遅くて迷惑をかけると思いますスイマセン……。
が、自分なりにこれから頑張っていきたいです。

序章

序章 夢への恐怖

6月の暮れ、日曜日。時刻は午後五時になるところだった。話はこの日から幕を開ける。

鏡見^{かがみ} 明季^{あき}は、たった今ある病院で人生最大の危機に遭う。
いや、たった今という表現は適切ではない。実のところ、自分が危機に直面しているとわかったのはずっと以前からだ。ずっと以前から、鏡見明季には気になっていたことがあった。

鏡見明季が、自分の身体に違和感がある、というよりは異常がある、と気づいたのは、今から約9年前。明季が夜、安らかに眠りについたその後、異常は起こり始めた。

この日、初めて怖い夢を見た。簡単にいうとそれだけだ。
つまり、明季の身体に起こる異常とは、眠りに就くと毎回きまって怖い夢を見てしまうということだ。

初めて怖い夢を見たその何日か後、再び怖い夢を見た。その何日か後も、またその後も。

最初はたまたまだと思った。偶然、自分だけがその回数が多い。しかし、それにしても多くないか？と思うところはそれくらいだった。

しかし、段々と回数は膨らんでいく。自然と、たまたまであったそれは時々に変わっていく。やがて、その時々も度々へとかわっていった。

そうやって頻繁に現れた怖い夢は、明季が九歳の年を迎える頃にはもう日常と化していた。

身体の内部に違和感があるわけでもない。病気でもない。身体
のどこも悪くない。しかしこれは、どう考えても異常事態である。
誰に起こるはずもない奇妙な現象は突発的に明季に降りかかっ
た。

昔からずっと不思議だった。昔からずっと、なんとかしたいと
気が気でなかった。そして今日。今、その答えを知った。「診たこ
とのない症例ですね。」

医師の口からは、驚きと困惑がいい具合に混ざりあったような
表情とともにそう告げられた。

診たことのない症例。それが今まで求めていたものへの答えだ。
求めていた答えとは全然違っていた。

「大変興味深いサンプルです。が、何かの病気でしょう。確かに症
例は深刻です。なんせ初めてお目にかかる病気ですから薬などはお
渡しできませんが、…できるだけ早く症状を止められるように研究
してみます。」

このような診断結果を明季は一人で受け取った。

実は、今日の前にも病院を訪れていた。その時は、子供一人で
診断を受けに来たところで通してもらえるはずもなく、名前をいつ
ただけで終わり。今度は親と一緒にお願いしますといわれてしぶし
ぶ家へと帰った。

が、どういうわけか、家に連絡があった。勿論、病院からだ。

今度また受けにきて下さい。一人でも構いません、と。

そうして今、言い渡された診断結果に驚いているというわけだ。
自分をサンプルかのようにいわれたこと、前例のないこと、医
師がとても興味深い様子でいることなど、氣にとめられる観点はあ
りはしたが、そのどれもが氣にならなかった。

衝撃的な結果によって、明季はなにも考えられない複雑な気持
ちにされていた。

一章（前書き）

なかなか苦勞して作成しました。読んで頂けると有り難いです。
感想もお時間があれば考えて頂けると幸いです。
宜しく願います！

一章

一、変えられない条件

「僕、トオルっていうんだ。よろしくね。」

唐突に、目の前の男の子はこちらに話しかける。それに対し、明季は応答しない。ではなく、応答できない。

そして、そんなものなしでもこれは勝手に進んでいく。

できることなら今すぐこの会話をしている現在、現時間を終わらせたい。それができなくとも、まず自分の目の前に立っている少年が何者なのかくらいは知りたいものだ。

しかし、そんな思いとは裏腹にこれは勝手に進んでいく。

木造建築のある見覚えのない家の中。かなり年季の入った、素朴という観念を統一している汚らしくも素晴らしい、といった一部屋の中。明季はそんな場所に立たされている。その部屋の中に明季と一緒にいるもう一人の少年、身長130？ 程度の肌色っぽい頭巾を被ったボロ服のその少年は、先程からこちらに笑顔を向けている。

曇りのない笑顔だ。見とれる程美しい純粋な笑顔に、明季の心も安心していた。

「この写真、ちょっと見てくれる？」

随分と古ぼけた写真だ。三分の一が白く剥げて見えなくなっている。

ここは古いもの尽くしの館か、と内心で一人突っ込みながら写真に注目する。

戦時中の写真だろうか。戦時中ならではの軍服を着ている男が写っている。

ふと、軍服を着た男の横で満面の笑みを披露している小さな男の

子に目がいき、釘付けにされた。

その幸せそうな男の子は、目の前の少年に激似していた。
というか、多分本人なのだろう。

…ああ。ということはあれか？今回はそういった類の設定か？ふん、そうかそうか。…はあ。

自分の問いかけに自分で納得する。毎度毎度、もうたくさんだよ。少年は、明季が写真に写っている自分に気がついたことを表情から読み取ると、いかにもそれを待っていたかのようにはっきりと口を開いた。

「それね、気がついた？僕がまだいたころの写真だよ。あの頃はとつても楽しかったなあ、いろいろと。大好きな父ちゃんと壊れかけた家の修理をしたり、大好きな姉ちゃんと川でずぶ濡れになつて遊んだり。」

毎日が生きてる、って実感があつてさあ。あの頃は本当良かった。」

少年の笑みは、写真に写っている満面の笑みそのものだった。

人はこうも純粹に笑うことができるのだろうか。少なくとも、数々の出来事を経験し汚くなっていった大人たちにはもうできないだろう。

子供だけが持つことのできる特有の笑み、というやつだ。

その笑顔はさらに語り続ける。

「ちなみにさ、この家って僕のお家なんだよ。きれいでしょ。」
両手を広げて紹介する。…きれい、には見えないが。

「ほら、後ろを見てごらん。」

いうとおりに後ろをむくと、木壁のすみ辺りに一箇所だけ色の明るい所があった。

修理のされた跡のようだ。

「あそこはね、本当に大変だったんだ。なかなか直ってくれなくてさ、父ちゃんも珍しく困ってた。」

一方的に喋る少年、明季がその少年に言及することはまだ出来な
いでいた。

「直ったときはすつごくうれしかった。父ちゃんはこれが達成感だつて教えてくれた。そのとき僕は達成感だったんだ。」

達成感の意味を詳しくは知らないのもあるう少年の気持ちのよい笑みはこれで見るのが最後だった。

「でも、もう少しだけ楽しみたかったなあ。」

言葉を寂しげに吐いた瞬間、少年から笑みは消えていた。少年の頬の筋肉が緩む。

先程まで明るかった部屋の照明は、いつの間にかすっかりと消えていた。あからさまに暗がりを感じた部屋。

明季の視界は無意識に狭まっていく。

無意識かつ不自然に狭まっていく視界のせいか、目の前の少年の悲しそうな表情がそうさせるのか、身体には若干ながら恐怖の色が注がれる。

「なんでだろう。なんで僕はもう生きられないの。なんで僕は死んじゃったのかな。なーんにもしてないのに。」

少年はさらに、どうしても解けない疑問を問い詰めるように訊いてくる。

「どうして？誰がやったの？誰が？誰が僕たちを…誰が？」

この時点で悲しさという悲しさも顔から消えていた。楽しみの代わりに現れた悲しみ。その悲しみの代わりに現れたのは、他でもない憎悪であった。

では一体その憎悪は誰に向けられているのだろうか。

それについては様々な考えを巡らせようと変わらない。状況を見る限りは、明季以外の何者でもないだろう。

なんでまた俺なんだよ。当然、理由らしきものは見つからない。当たり前だ。夢とはいってもこうだ。明季の思いなど一切無視し、卑しい悪夢を見せ続ける。

不格好に歪んでいたその顔は、突然と表情を変える。

なにかを閃いたような明るい顔をしている。先程までの憎悪は感じられない。

だが、初めに見せた満面の笑みとは違う。はっきりとはわからない。わからないがなにか、根本的なものが違っているような気がした。

「そうか。わかったよ。」

次に少年が口に出した言葉に身の毛がよだつ。

「君のせいなんだね。」

逆に明るいトーンなその声は、背筋を余計に凍らせる。

「わかった。わかったよ。そうだ、君のせいだ。君のせいなんだね。」

どうしてそうなるのかわからない。しかし、その疑問については答えを探しても出てこないだろう。

高らかに笑いながら訴える不格好な顔にはもう、正気が感じられない。狂っている。

足元に違和感を感じて視線を下にやると、足元の木面が變形していつている。

木面の濃い茶色に加え、黒と紫、不気味な抹茶色が混ざり合い、渦をつくる。

木面は木面でなくなり、もはや床の原型を留めていない。こんなところに立っていられるのが不思議なくらい、明季の足の下にある渦の中心から落ちてしまいうさだ。

次第にそれは足元だけでなく、真正面から四方八方へと浸透していく。方向感覚を失う。

逃げ場を探し、後ろを振り返る。そこにはなににもない。なにも見えない。逃げられない。

カツ、カツ、と音がする。少年が足を踏み出す音だ。恐怖が、接近する。

逃げたい。終わりたい。だが、明季の脚は微動だにしない。

少年は、こちらに足を進めながら何かを呟いている。

「……」

「……のせいだ。」

「…のせいだ。」

小さい声で呟かれるその声は、足音とともに段々と大きくなる。身体中に緊迫感が迫る。

寄るな、近寄るな。嫌だ。明季の願いは通じない。

少年と明季の距離は着実に近くなる。

「お前のせいだ。」

「お前のせいだ。」

「お前のせいだ！」

声を荒げ、叫ぶ。お前のせいだ、と。

もう耐えられない。何故自分がこの悲痛な叫びの標的にされなければならないのだ。

覚めろ、覚めろ、覚めろ。そう願うことしかできない。

その夢の恐怖の果て、明季はたぎることのない絶望だけを感じていた。

はっ、と布団をめくって飛び起きたのは午前四時。太陽は、二階にある明季の部屋のカーテンをうつすらと濡らしていた。

今日もいつものように最悪なお目覚めだ、と小さく文句を零して階段の電気をつける。

起きたばかりの不安定な足どりで、脚に衝撃を受けながら階段を下りる。

台所の電気をつけ、ジョッキを手に取り水を注ぐ。大きなジョッキで軽く二杯は水を飲む。

これは、最近の日課となっている。

寝汗のせいで、水分が異常にとられている気がしてならないからだ。

時刻は四時であるから、今更再び布団につくことにも気が向かない。二階には上がらずに居間へと向かってポケットに入っていた音

楽プレイヤーを取り出し、音のない空間で静かに聴くことにした。時間はあつという間に過ぎていくものだ。無駄なことに時間を使った後ほどそう感じる人が多い。楽しい時間、一生懸命に過ごす時間も同様だが、明季が使った時間は言うまでもなく前者だった。時計は回り、午前六時を指し示している。

「あー、しまった。」

こういうとき、大抵は嫌なことを思い出す。明季は、まだあと二つ宿題が残っていることを思い出した。タベしっかりやつおかなかった、そしてたった今まで音楽で時間をつぶしていた自分のアホさ加減が嫌になる。

「くっそ、まあいいや。電車でやる。」

朝の残り時間では無理だと見切りをつけ、学校へいく支度を始めることにした。

「おっはよー！」

と、耳鳴りが聞こえる。電車に揺られる明季の身体。さらに明季の鼓膜を揺らす者がいる。

朝っぱらからなんてうるさい奴だ。相変わらずこいつの声は耳に響く。

「朝っぱらからなんてうるさい奴だ。相変わらずお前の声は耳に響く。」

思ったことをそのまま口に出す。耳鳴りに近い声の主、水梨紗耶みずなしさ子は明季のいったことを気にとめる様子もない。

可愛げのない奴だな、苛立ちさえ少し混じった感情が心に沸く。紗耶子とは中学校からの同級生だ。新しい高校の中での数少ない知り合いということで、中学在学中よりも話すことが多くなった。メールも、高校に入ってからアドレスを交換し、連絡を取り合っている。

話の最中にすっかり自分の想い人のことを暴露してしまい、それをきっかけに恋愛相談とかいう話を多くしなければならぬはめになったのだ。

「そういう恋愛相談ってやつからカップルが誕生するんだよねー」これは、とあるお調子者の言葉である。羨ましそうに微笑を加えてそういわれたことがあるが、それはよくある一つのパターンにすぎない。

明季は、紗耶子とそうなることをまだ望んではいなかった。

と、ふとそんなお調子者の言葉を思い出していると、携帯から着信音が流れる。明季は慌ててポケットから携帯を取り出し、そして溜め息をつく。

「やめろよ、お前。」

着信はすぐ隣に座っているいる水梨紗耶子、という人物からだった。

「だってー、楽しいし。いいじゃん！」

笑みを零してくれた顔をしている。

「そんなので楽しいんだったら一生やってろ。」

「うん。じゃあこれからもやってあげる。」

「子供か！あんたは。」

「まだ子供だもーん」

馬鹿にしたような言いぐさを上手くかましているつもりなのに何故こいつは屈しないのか。こつこつも無邪気になられるとこつちが屈してしまう。呆れのあまり…。

「本当バカだな、あんた。バカにしかできない返答だよ。」

「ふん。それでも明季さんと同じ高校の同じコースですー。」

ふてくされた態度に可愛さを感じとってしまうのは気のせいだろうか。

「俺、勉強するから。」

「勉強じゃなくて宿題、でしょ？」

「よくわかったな。」

「明季はこんなところで好き好んで勉強しない。っていうか明季は勉強をしない。」

「失礼な。俺だって勉強してるよ。」

はつきりいって、勉強という勉強はしていない。しているのは宿題だけだった。

「いつから？」

疑いの目を向ける紗耶子に、苦し紛れに答える。

「……最近」

「ほらねー！」

呟いた瞬間、ものすごく嬉しそうに顔を向けてきた。

異論はございません。本当は最近もしていないですから。

「ちよつと、本当に宿題やるから」

このまま話し続けていては宿題が危ない、と思い、話を切った。ノートと教材ををめぐり、宿題の準備を始める。

残っている宿題は英語の教科書写しと古典の単語練習だ。単語のほうは提出するわけではないからなんとか大丈夫だが、英語のほうは教科書二ページ分をやらなければならない。

急いでペンを走らせていると、おもしろくないのは急に会話を中断されてやるのがなくなった紗耶子である。

紗耶子はいかにも不満そうにノートの端をツンツンと引っ張っている。

字が書ける程度の手出しで我慢してくれるのはありがたいが、気が散る。

「やめろよ。ずれる。」

「ずれないようにやってあげてるじゃん」

「やってあげるようなもんじゃないだろ。」

「…つまんないからやめて。家でやってないのが悪いんじゃない。」

「今いったって仕方ないだろ。お前も勉強すれば？」

少し考えるようにして黙り込む。余白を作ってからもっともそうに口を開いた。

「私、そんなに暇じゃないから。」

いやいや、どう見ても暇だと思うが…

心の中だけで突っ込んで、敢えて口出しはしなかった。このままでは手抜きの宿題も終わらない。

形だけの宿題にももう慣れ、自分への罪悪感も感じない程に麻痺してきたが、狭くて書きにくいところでペンを走らせることには慣れない。

広げた教材とノートのバランスが悪く、端からずり落ちてしまいそうだ。

下敷きを敷いても尚不安定なノートの地盤では書きにくくて仕方がない。

水に背後をとられ囲まれた漢人の如くノートに無造作に書き写し、ちようど目的地に着く辺りで教科書二ページ分を書き終えた。それまで紗耶子からの声は聞こえなかった。横を向くと、紗耶子は大人しそうに何もしないで座っている。

「終わったぞ。音楽とか聴いてりゃよかったのに。」

「残念ながら、今日は家に留置してきました。」

「あつそ、ご愁傷様です。」

電車内放送が目的地の到着を知らせ、ドアが音を立てて開く。

「よし。行くぞ、チビ。」

「はい。ボサボサ頭。」

外見を軽く罵倒し合い、勢いよく席を立つ。

朝の行列に二人は紛れ、見慣れた通学路を通り高校へと向かった。歩道を歩いていると、やがて建物の一部が目映った。純白とまではないが、公立高校よりは綺麗であるだろう外装で高校生を迎え入れるのは、誠華学園高校。

明季と紗耶子の通うこの私立高校は、生徒数が県下最多であることが有名である。

私立の高校はコースで分けることが多い。誠華学園の場合は主に三つのコースで成り立っている。

難関国公立大学を目指す特別進学コースを四組、難関私立大学を目指す普通進学コースを四組、大学進学及び就職を目指す予備進学コースを四組、といった具合で三学年ともが構成されている。

校舎は、人数が多いために東棟と西棟の二つに分かれている。四階建て高層で長さが300mくらいあるが、それでも教室は足りないくらいだ。

校庭に仁王立ちする東棟と西棟の隣には、一本の道路を挟んで体育館が存在感を放っている。

体育館のほうにちらつと目がいく。放課後に用があるのだが、今は明季には無縁で行く必要はない。待ち遠しい気持ちを押し殺して体育館の前を右折する。

下駄箱のある方面へ向かい、靴をしまつて校舎へと入っていった。

高校にもやっと慣れた頃、一学期ももう終わりを告げようとしていた。

暑い太陽の視線が鋭くグラウンドの高校生たちに注がれる。

体育館も蒸し暑く、シャツ一枚すら脱ぎたそうしながら風を扇いで猛暑の気温をごまかす。

何人かの部員たちは、動作一つ一つの終わりに一回一回汗を拭き、えらそうにしてスポーツドリンクへ駆け寄っている。

放課後、明季はそんな風景を遠くから眺めていた。

二階のフロアに腰を深くおろして自分の無念を噛みしめる。

馬鹿みたく気合いを入れて叫ぶ姿や決まったときの嬉しそうに喜ぶ表情、その雰囲気、ハイタッチ。厳つい顧問の先生に起こられている姿さえ、明季の目には楽しそうに写っていた。

放課後にこうして、暇があればと足を運んでいるため、バレー部のメンバーとはいつの間にか顔見知りとなっていた。

明季は、バレー部とともに練習することができない。部活に入ることができないのだ。

明季の通う私立高校、誠華学園は面倒なルールが山ほど存在する。

小学生だつていわなくてもできるようなルールに、教師たちは口を酸っぱくしている。

この学校は、人数の関係からなのか、偏差値に著しくバラつきが見られる。

故に、生徒たちの生活態度も様々だ。ランクで人を分別するのはよくないが、この学校ではコースという形で生徒のランクがきつちりと分けられている。最高ランクの特進クラスも大きく二つに分けられている。これが明季にとっては大きな問題なのだ。

『奨学生である場合に、部活動への入部を禁止する。』
これが、誠華学園特有の部活禁止制である。

ひどいことに、この制度は入学する前には知らされていなかった。つまり、入ってしまったえばもうおしまい。後の祭りというわけだ。そんなわけで、明季の志望しているバレー部には入れず、今もただ茫然と熱い視線を送ることしかできないでいた。

ふいに後ろから、弾くように肩を叩かれる。

振り返ると、そこには女性にしては平均的よりやや高めの身長をした、ロングヘアーの女の子が立っていた。

二人組で、片方には見覚えがないので初対面だろう。

「何でいるの？」

「いちゃ悪いのかよ。せつかく一人で寂しそうにしてる子に声かけてあげたっていうのに、何？その冷たい反応。」

紗耶子は明季の対応に満足いかなかったようだ。明季としてはごく普通の態度だったのだが、紗耶子は明季の一言でもう既にへそを曲げている。

「女子のバレー見に来たのか？」

「せいかーい！でも半分違うよ」

「別の理由でもあるのか？」

嬉しそうに顔をパツと変えて答える。

「なんだと思う？」

「お前のような変物の考え方などわかるか。」

「変物っていうな。私はどっからどう見ても正当な人間ですー！」

紗耶子は、頬を赤く膨らませて明季は睨んでいる。

「正解は、バレー部とバドミントン部にかっこいい子がいないか探しにきたの。」

そらみる、やっぱり変物じゃねーか！

その言葉に呆れてわざと顔をしかめる。

「うわっ、引くわー。」

明季が身を引いて表明すると、焦ったのか慌てて引かないでと懇願してくる。引かれるようなことをいったことには自覚があるようだ。友達を連れてきていた紗耶子は、いつまでも明季と話していても友達に悪いので明季と紗耶子の友達との軽い挨拶を仕切り、明季から離れたベンチに座った。

一瞬の邪魔者も消え去り、明季の目は再びコート上へと吸い込まれていった。

その夜、ある変物から着信があった。紗耶子だ。

一行しかないメールの内容だったが、その内容に明季の胸が騒いだ。

見た瞬間、わけがわからなくなり顔が青ざめた。

そこには絵文字もなしに、『助けて』と記されていた。

心の底から動揺が走る。見ていたテレビは先ほどまでとは違い、面白さを含んでいない。落ち着かない心を落ち着かせるためにひとまず自分の部屋のベッドに寝転ぶ。……落ち着かない。

大したことはないかもしれない。もしかすると、家の玄関にゴキブリが何かが出現して困っている、といった類のものかもしれない。あるいはそれ以下か、……それ以上か。

『助けて』の重さが測れない。そこにどれだけの意味が込められているのかメールの文面を見ただけでは推測し得ない。

とりあえずここは妥当な返信をと思い、何があつたのか、とメールを返した。

―部屋の沈黙は続く。明季は紗耶子からのメールを待つ一心だ。もう五分経つただろうか。状況から考えて、返信はすぐに返ってくるはずだ。

―しばらくして、携帯が振動を發した。

返ってきたメールを見て、ひとまずは安心する。

メールには、『孝介に告白された。どうしよう?』と書かれていた。いや、知らんよ。

本気で心配してしまったことを後悔する。半分呆れながらメールを返す。

『助けて、つてふざけんなよ。一応だけど心配しただろ。紛らわしいからやめろ。』と、大体こんなようなことを送り返す。

すると、今度はすぐに携帯が鳴る。

『だって〜(泣)』とメールが返ってくる。うざっ、と口にしながら実際はこうして返信がくることに安堵していた。

しっかりと自分に悩み事を打ち明けてくれることが嬉しくもあった。

詳しく話を訊いていくと、紗耶子は孝介に告白されて付き合つか付き合わないか迷っているといったところだそうだ。

孝介、とは紗耶子と同じく同中学校のクラスメートで今は別の公立高校に通学している、なかなかの容姿の整った奴だ。

性格は極端にお人好しで、決して悪い奴ではない。むしろ、明季はとてもいい友達だと感じている。

メールを続けていき、他に好きな奴がいないのなら付き合ってみてもいいのではないか、と様々に意見した上で最終的な判断は本人に任せた。

『うん、考えてみる。』深夜の返信を確認し、覚めてしまった目を閉じて布団をかぶった。

ぶはー。熱を含んだ布団が放られる。朝の苛立ちはいつもと変わらずピークに達している。身体の神経を大袈裟に障り、怒りを逆撫でする。

下へ駆け下り水を二杯ほど飲む。乾いて悲鳴をあげていた喉がやっと潤いを取り戻すが、その潤いは身体内で回りきり、一番潤いが欲しい場所には届かなかった。

今日も早めに起床してしまったのだが余白の時間を勉強などに使う気は更々ない。何に時間を使うでもなく携帯を眺め、無駄な時間は過ぎていった。

何事もないように学校は始まる。こちらの境遇など考えずに。

嫌にきれいに光る学校を見上げ、何も考えていないような顔をして颯爽と歩く。こうして歩いていると色々なものが目に飛び込んでくるが、どれもあまり気にしないのが一番いい。

校門で生徒たちに挨拶を無視される校長。スカートの丈に目を光らせる生徒指導部。ワックスをつけた先生に頭ごなしに叱られる下げパン男子。出会うべくして出会ったカップルから一種の故障で出会ってしまったかように見えてしまうカップル。気の弱そうな少年とその後ろに控えたがたいのいい見るからの馬鹿。

この光景たちが面白く思えてしまうのは俺の心が歪んでいるからだろうかと思いつつ、それらを一扫して颯爽と進んでいく。

一時限目で抜き打ちテストが行われることとなった。こちらの境遇など気にもせずに。

クラスのあるお調子者は人生に絶望したような声で叫んでいる。

「いやーだー。カラオケでナンパして下手に振られちゃうあの空気感より嫌だー。」

推測ではあるがカラオケでナンパして下手に振られるあの空気感を知っているのは全国の高校生のなかでも数少なくこの学校内ではお前くらいものだろう。

それにしてもテンションは下がる一方だ。例えば悪いが考えには

同意しよう。今の気分は、欲しいものを求めて店を三軒回ったが、納得のいく物には出会えず、渋々別の日にまた違う店にいくことを決めたときと似ている。

自分の例えに納得しながら一方的に与えられた答案用紙に答えを書き込んでいく。そして思う。ヤバい。これは、カラオケで下手に振られるあの空気感よりまずい、と。

放課後になり、通常通りバレー部のいる体育館へと向かう。するとそこには既に一人、あるお調子者が座席にどっかり座りバレー部を見物していた。

「おい。明季ちゃん」とそのお調子者はこちらに声をかけている。明季が来たことに気づくスピードは偶然かもしれないが、並ではなかった。

いきなり声を向けられて少し戸惑いを感じさせられるが表情を変えないように意識してお調子者の隣に腰掛ける。

「やつぱ部活っていいもんだよな。明季ちゃんがほぼ毎日体育館に通い詰めるのもよく分かるよ。」

「やつとか。っていうか、その呼び方やめろよな。ただでさえ女っぽい名前なのに本当に女みたいだろうが。」

お調子者の柿本劉治は、かきもとりゅうじ右手の人差し指を立てて明季に視線を送る。

「分かってないな、そこがいいんだろ。要はインパクトだよ。男だったら影響力がなきゃ。」

分かってないのはあந்தのほうだ。よくもそんなに調子のいい発言がいつてられんな、お調子者だけに。

少なからず明季がこの名前にコンプレックスを持っていることなど劉治には知る由もないのだ。

「まあまあ。一緒に部活を頑張ってきた仲じゃないか。この立派な性格のおかげで勝てた試合だって何度かあったろ。」

素晴らしく自慢気に訊ねてくるのではない、と適当にあしらう。劉治とも中学からの付き合いで、バレー部として共に練習の日々

を過ごした。お互いを分かち合う親友のうちの一人だ。

当の本人が胸を張っていうように、劉治には何度となく助けられたことがある。キャプテンの肩書きを背負っていた劉治は技術力よりも場を盛り上げることに長けていた。劉治の性格を知っていなければ、尊敬できる選手にだって成り得るだろう。

本当に劉治がいなかったら県大会で三位の称号など取ることはなかっただろう。しかし、劉治が調子に乗らないようにと褒め言葉は呑み込んで胸の中に閉まっておくことにした。

「スパイク決まったー！あのエースの人かっこいいよな。あんなもんとれねーよ。」

「ふん。県で認められてたレシーバーが何をいうか。」

しまった。うっかり声に出てしまった。

笑い混じりに言葉を吐いてから劉治を褒めてしまったことに気がついた。あの程度のスパイクなら中学時代強いチームにぶち当たりまくってきた県三位のスーパーレシーバーに取れないことはないだろう。誠華学園のバレー部にとって劉治を部員に持てないのは大きな損失だ。

しかし、そこはまんざらでもないのか劉治の反応は薄く、横顔に悲しみの色が混じっているように感じた。

劉治はファインプレーが出る度に調子を上げ、明季はそんな劉治とバレー部が成す雰囲気を楽しく見物する。

バレーがやりたい。

その思いは、日が過ぎゆく程に次第に大きく膨らんでいく。

一章（後書き）

いかがでしたでしょうか。至らない点への指摘があれば今後の参考
にさせて頂きますので、遠慮なくお願いします。

今後とも一生懸命執筆していきますので宜しくお願いします。

二章（前書き）

謎の病気などの関連が少なかったという反省点もありますが、まあ頑張って作成しました。
楽しんで読んで下さい。
それでは本編へどうぞ！

二章

無風の建物の中で、柱と柱の隙間から漏れる日の光に照らされて空気の歪んだ流れが見える。その空気の歪みを挟んで奥にいる者たちの背中が如何にも暑そうだ。

太陽光線をガンガンに浴びせる真夏日のような暑さに、身体の毛穴は悲鳴を上げて大きく開いている。

悶々と漂う大気の層は強制的にかり集められた個々のやる気を無に変える。元よりやる気など持ち合わせていない者たちは、この環境に不満を募らせるばかりである。

夏休みももう虚しく終わり、二学期が勢いなく始まった。

今現在行われている始業式では先生と生徒の士気に大差がついていることがはつきりとかんじとれる。前で生徒指導部長が堂々と、そして熱く語っている。

「夏休みは充実したものになりましたか。毎日のように部活動に励む者、勉強に熱心に取り組む者。それぞれがそれぞれの目標に向かって意義のある時間を過ごせたことを期待します。特に、我が校が誇る野球部は休みの日など一切なく遠い地方に遠征に励行するなどして頑張ってくれる姿があったと報告を受けております。また、その中でも私が素晴らしいと思う点は……」

長々と語る顔には大体何割くらいの注目が集まっているだろうか。既に何度も注意されてようやく静まった生徒たちの喧噪は徐々に徐々にと復活していく。一人でも話し出すと連鎖反応を起こしてざわつき始めるこの空間は、それは居心地が悪くて適わない。

「静かにしろ！そこ。」

人が気持ち込めて喋つてるときくらいしつかりせんか、バカモン」乱暴な物言いで一喝するが、収まったざわめきはただ単に一時的なものに過ぎない。何より、この一喝の重み、意義をわかっている者がこの場にどれほどいるのだろうか。

…なんか、悲しい。

その思いは、おそらく自分以外は感じていないのだろう。見ているだけでまた、無意味な後悔を繰り返してしまう。この学校に籍を置いていることへの後悔を。…誰にわかるだろうか。

生徒指導部長の話は明季が思いに耽るうちにも続き、その次の校長もやがて口を閉じた。式が終わり、自分のクラス、一組の教室へと移動する間に、飯島という知人に肩をポンと叩かれる。後ろから現れた飯島はいつもと変わらず元気そうに微笑んでいる。

おう、おはよう。

明るい声で発せられたその挨拶には特に意味はないようだ。さり気なく挨拶を返してみるとやはりそれまでで、会話が続くことはなかった。

自然と交わされた挨拶だが、明季には少し違和感がある。挨拶だけ、というのがどうも後ろ髪を引かれる。話の頭をつくるのは大抵飯島のほうだが、今日に限って話すこともそうないのだろうか。

先に歩を進めている飯島を見ながら微妙な心残りが脳を掠めていた。

教室に入るとお調子者が真っ先に机に詰め寄ってくる。

「なあなあ。五組の藤川さんって知ってる。」

「誰それ。知らないな。バレー部にはいないよな。」

「いないよ。お前はバレー部しか見てないのか、脳みそバレー男がバドミントン部の女子だよ。」

「女子かよ。興味ない。で、何？」

いちいち変なニツクネームをつけられることは気にしないで心の中で劉治の女たらしぶりに溜め息をつく。一人で話し続ける劉治の話を訊くのは酷ではないが、異性についての話はあまりに不慣れで好きではない。

「お前さあ、彼女とかつくらないの。そろそろつくってもいい頃

合いだと思うんだよね、ルックスも悪いわけではないし。いつまでそうしてるわけ。」

「確かに外見はお前よりいいけど、俺はしばらく一人で生きていくって決めてんだ。それに、彼女がいない奴にいわゆる筋合いはないな。」

劉治への皮肉を丹精に込めていじらしく言い放つ。が、その皮肉は劉治の中に皮肉として受け止められなかった。

「え、いつてなかったっけ。俺彼女いるよ。」

全くの初耳の言葉は明季にとって気持ちの高ぶる衝撃的なものだった。彼女を募集していない明季には親友の幸せなその発言が嬉しいばかりだ。

「いつからそんな相手がいるんだ」

「結構前だよ。中学三年に上がる頃かな」

「相手は？」

「橋本りえ、って子で、その当時S塾で一緒だったんだ。それでまあ進展しちゃったわけだ」劉治に彼女がいるなんて想像ができない。傍から見ると彼女がいてもおかしくない風貌をしているが、明季にとっては見慣れた容姿をした、はしたない男と付き合おうという女性の思いは完璧に圏外へ飛ばしていた。

かといって出会いのシチュエーションが思い浮かばないわけではない。劉治は、今珍しいくらい肉食系男子だ。小学一年生の幼い劉治が初めて会った同級生に振られていた光景を思い出す。

どうせ片っ端から声をかけ、ついに当たりを引いたところだろう。

「何回振られてもめげない立派な姿、尊敬するよ」

「何いってんの？意味わかんね」

首を傾げる劉治を傍らに、自らがそうして生きていけたらどんなに楽だろう…と非現実な妄想を膨らませる。

「明季ちゃんってさあ、自分が結構人気あるの知ってる？」

「訊いたことないな。そりゃ流石に、俺の容姿は世の男性の平均以

上だとは思っけど、モテたことはないしな」

「性格上問題ありだもんね」

「恋愛的なものは俺に向いてないんだ」

あっさりと苦手意識を植え付ける明季に、劉治は最もらしいとどめを刺す。

「それはまさしく負け犬の遠吠えってやつだね。良い言い方すると堅い男だけど、ぶっちゃけ単なる寂しい奴？醜い言い訳っていうんだよ、それ」

そんなことは知ってていつてんだ、敢えていうもんじゃない。

惨めな自分を言い当てられて憤りを胸に溜める。しかし、急に変化された話の流れに動揺が多くをしめた。

「もうこの際、紗耶子でよくない？」

何故か数秒間の沈黙が続いてしまう。何気なく訊いたのであろう劉治もそろそろ沈黙に不信を感じ始める頃だろう。

直感的に思った。―悟られてはまずい。

…どうだろうね。一緒にいて楽しい奴だけど、恋愛的な目線では見たことないな。

詰まりながらも編み出した苦し紛れの言葉に、劉治はたいして違和感を感じなかったようだ。

違う話題に方向がそれると胸の鼓動がひとまずは落ち着いた。しかし、明季にとっては自分自身のこの摩訶不思議な挙動が一切もわからない。その中でも度を抜いて謎めいていたのは、焦りを煽られる際に思った直感的な意識。

―悟られてはまずい

一体何をだろうか。何を悟られてはいけないというのだろうか。結論に至るルートは見つからない。それどころか、出発地点さえ掴めない。

不思議な胸のどよめきは一体何だったろうか。

超不慣れな恋愛的思考は、恋愛において恐ろしいほど鈍感な明季にしては全く先の見えないものだった。

劉治とのじゃれ話を終えて授業が始まる。黒板に浮かび上がる数式は一体何を示しているのか。集中を忘れると明季でさえも理解不能になるような目の前の文字は、劉治にとってはチンプンカンプンだ。紗耶子に至っては意味をも成さないだろう。

「えーと、この問題で求められているのは、……であるからここでは判別式を使います。

……とすると、えーここはこうなるよな、ん？違うか？えー、ここはこうやな。だから、そう。答えは $m - 2, 3$ m となる、と。そうやな？違うか？」

事前にやっとしてくれよ。そんな願望は持つてはいけないものなのだろう。60代の数学教諭は黒板と会話をしながら自分で問題を解き、授業を展開している。こんな教え方をする者が教師と呼べるのか。

授業的には問題はないのかもしれない。しかし、教師と名乗る以上、生徒の学力を上げることを重点的に考えてはもらえないだろうか。

黒板を見上げ、途中の説明を省かれて理解ができないうちに展開される問題をただノートに写すだけの状態で、果たして学力など伸びるものか。

「ねえ、明季さーん。今先生が何をおっしゃっているのか教えて下さいー」

「知らねえよ。横に訊けばいいだろ」

はやくもギブアップしたような声色の紗耶子が一席前の明季をつつく。紗耶子の席は一番後ろで中央に近い位置だ。両サイドには男子が座っている。

紗耶子はふてくされたような顔で不満を訴えつつ、隣の子に声をかける。

「山川くん、ちょっといいかな。ここ、らへん一括して全部わかんないんだけど」

教材から黒板と同じ問題のところを差し、眼鏡をかけた山川くんに

助けを乞う。だがその助けは受け入れられなかった。

「すすす、すいません。ぼ、ぼくも今ちょうどそこだけわからなくて、教えられるのなは教えたいんですけどちょっと無理です。面目ないです本当に。僕なんかに声かけてくれたのに、」

「いえいえ。そんなに謙遜しなくても。こちらこそ一生懸命勉強してるときにごめんね」

「いえー、そんなー、ごめんねだなんてー」。

愛想笑いを含んだ紗耶子に山川はひい、と言いながら二、三回頭を下けている。

必ず敬語調で繰り返される山川の会話はこのクラスの名物だ。

人間的な面白さが絶妙に腹の底をつく。山川自身は国宝ならぬ学宝といってよいだろう。紗耶子は左隣のもう片方の男子にも声をかけたが、軽く断られている。

「ということで明季さん。よろしくお願いしまーす」

左隣の堅物の男子に、ケチー、と文句を吐いてから再度助けを求められる。

まあ、お前一人じゃ理解できないだろうからな。仕方ないか。

黒板に目を向けている教諭には注意をされるはずもなく、椅子の向きをクルツと変えて紗耶子への説明に専念した。

何もかもが脱力感に苛まれ、身体までもが脱力している。今飯島が動かすべき自らの胴体は一向に動く気配を示さない。

どうして。どうしてだろうか。

胸の中で自問のみを繰り返し、また整然と吹いてくる冷風を全身に、受け止め続けていた。

ただいま。

家に帰ると重い鞆を床に放り投げ、ベッドに倒れ込む。見上げた天井の明かりはなく、薄暗い部屋。明かりなど到底必要のないもので、目障りなだけだ。そこら中に脱ぎっぱなしの衣類や溜まっていったただの紙切れが雑多に散っている。

カーテンはもうずっと閉めたままだ。飯島が少し向きを変えると、ベッドはギシギシと壊れかけた軋み音を立てる。

そんなちょっとした雑音さえ不快に思い、耳を塞ぐ。イヤホンを両耳に挿入し、一人の世界へと消え入っていく。

何が原因なのか分からない。分からないが、高校に入学した途端に飯島には、皆からやつかまれる孤独なポジションが与えられた。

訳の分からない状況が生む訳の分からない悲壮感は、もうすっかり胸に馴染み始めている。

いつからこうなってしまったのだろうか。

十分な温もりはなく何だかもの寂しい布団を抱き締め、今から少し前のことを思い出す。

普段と何も変わらなかった。普段と同じように太陽が照り、空から元気をもらうことのできる朝を迎えた。

朝食をがつつり腹に蓄えて気分爽快で電車に乗り、学校へと向かった。

学校の表面はいつも通り公立高校よりも何倍も美しい輝きを放っていて、隣を歩く生徒たちの表情も豊かに見えた。

だがその美しさは本校、誠華学園が持っているものとしてはあまりにかけ離れていた。

この私立学校は、汚い。

飯島は早くもそれを思い知らされることとなった。

これまで無知だった人々の心中の汚点。それは飯島の教室、一年三組で一方的に教え込まれた。

呆気にとられた。

まさにその言葉通りだった。教室のドアを開け、足を踏み入れた途端に飯島の左方向から赤い固体と水が飛び込んできた。水は見事に命中し、飯島の全身を冷たく浸した。足元に転がった赤いバケツを見つめながら現状を見定めるのに少々時間を要する。

飯島は、脳内で試行錯誤を繰り返した後、どうやら自分は今ひと

い目に遭っていることまではなんとか分かった。

バケツもろとも水を放たれた一直線上には男子生徒三人が堂々とした出で立ちで立っている。いずれもクラスの中心人物ばかりだ。さらにその後ろにはその他の主要な男子たち。その両サイドには気が引けた女子たちの姿や控えめな男子の姿があった。

抜きん出て立っている男子三人は、卑屈な笑みを零している。

「飯島、おはよう。朝のシャワーが気持ち良かったか」

言い放った真ん中の一人に次いで左右の二人が嘲るように笑い声を発する。

「……………何？これ。事故？」

「なわけないだろ。そんなに巧いこといく事故があるかよ。意図的にかけたに決まってるんだろ」

「…えっ、何で」

「分からないか？今お前が水を掛けられた意味。分からないなら親切に教えてやるしかないな」

随分と楽しそうに喋る顔つきからは危機感を感じていた。そしてその次に発せられた言葉に事の次第ははつきりし、一応ではあるが事態は呑み込めた。

「一種の‘いじめ’ってやつ？」

おどけた風に吐くその言葉に重みはなく、言葉の持つ意味との距離の差に飯島の身は恐さで縮んだ。

三人とは特別仲がいいわけではなかったが、悪くもなかった。が、たった今起こされた宣戦布告によって気付かされた。

こいつらは自分のことが気に入らないのだ。

まったく今まで疑っていなかった。疑う必要性を感じていなかった。

教室には飯島が最後に入ったらしく、全員が勢ぞろいしている。いつもなら皆が揃うまであと三十分近くある。これだけ早く校舎に足を運んだのは一体何のためだろう。考えて、簡易すぎた問題を解くのをやめた。

教室全体に醸し出された雰囲気になんて耐えかねて、泣きそうになり歪んでいく顔を腕で乱暴に覆い隠し教室を飛び出して、誰もいない居場所を求めて必死に駆けた。

ひとまず、静けさとゆつたりとした大気が漂う屋上で高鳴っている胸を撫で下ろす。

屋上に流れているヒンヤリと冷たい微風が心に馴染んでいた。

掃除のされていない屋上であるから汚れは床一面にこびりついていて、座って落ち着くことができない。足で埃を軽く蹴り、錆び付いた壁面を背に腰掛ける。

屋上にたった一人という事実は飯島の心中をそのまま表しているようだ。

新鮮な空間に少しずつだが心が落ち着いていくのが分かる。落ち着きを取り戻し、飯島は自分が涙を流していないことに気がついた。しかし、決して悲しみの度合いが小さいのだとかそういうことではない。人災からのダメージが過去最高であることは確かに感じているのだ。

――悲惨すぎて、涙がでない。

これが一種のそういう概念に沿ったものなのかもしれない。そうやって冷静に今の自分を見つめられるのは嘗てないほど心が卑屈になっているからだろう。

身体の隅々まで浸透した冷たい温度を感じて思い耽るだけで、時計はどんどん進んでいく。

結局、授業を二時間続けて休んだ。休もうと思って休んだわけではない。

完全とはいえないが心がようやく本当の落ち着きを取り戻した頃、腕時計の針は二時限目の終わりを指していた。

しかし、もう一時限このままでいてもいいのではないか――

自らの中に相反する思いに迷っていた。

もう二時限もさばった後だ。流石に今後の学力に支障をきたすのはまずい。二時限さばった者の言葉とは思えないが、一時限だけでどれほど差が開くのか少しは分かっているつもりだ。それに、奴らの為に時間を無駄にするのはとても正解とは取れないだろう。

正解は自分の中ではつきりしている。だが、――怖い。

白い目で見下すようなクラスに戻ってみるとどうなるのか。想像すると、身体が小刻みに震え上がる。どんな罵倒が、どんな屈辱が彼を待ち受けるのか。その姿形は掴めないが、輪郭だけは容易に想定できた。

ついに決心、というか覚悟を決めてのそのそと歩き始め、やっと教室の前に着いた。

中では授業後の楽しそうな笑い声が交差して響いている。しかし飯島には笑い声が嘲りにしか聞こえない。怖じ気づいたが、ここで引き返してしまっただけはここまで足を運んだ意味が消えてしまう。

ゆっくりとドアを開け、中へ入る。ドアを開けたときに黒板消しが落ちてくる、なんて典型的なパターンにも用心したが、それは流石になかった。

予想通り、飯島が教室に入った瞬間、通常の授業時より静けさを増した。教室を去るときに置いてきた飯島の鞆は意外にもしつかりとロッカーの中に整頓されてあった。

なんだか教室中に見られているようで気持ちが悪い。飯島はとりあえず次の授業の準備をしようと鞆に手を伸ばした。机に運び、鞆のファスナーを開けたそのとき、絶望に近い思いが飯島を襲った。

こんなに汚れた鞆を見るのは初めてだ。墨でもつけたのか、鞆の中にある何冊もの教科書たちは黒ずんでいる。教科書を鞆から上げると端から墨汁が垂れている。

臭いが酷い。墨の臭いしかないのだが、飯島はそれ以上の匂いの残酷さを感じ取った。

もうどうしていいかわからない。

飯島は教科書を濡らされた鞆の中に戻し、手に墨が付いていることなど忘れて頭を抱えた。

今までに感じたことのない痛みだった。いじめを受ける世界中の人々を心から哀れに思った。これほどまでに辛い思いをさせられるなんて考えても見なかった。

戸惑った飯島の姿を見て嘲笑を飛ばすクラスメートを思い出す。

―何が楽しい。何が可笑しい。酷い。酷い。酷い。

ただ一人、流れゆく時の中に恐怖と憎悪と己の精神の脆さを知り、悲しみに打ちひしがれていた。

学生の本文は勉強である。

確かに、その言葉は正論だ。学生にとって「勉強する」ということは大前提であり、最も力を入れるべきところだろう。しかし、勉強だけしていれば良いというのは違う。勉強をより求めるのと勉強だけを求めるのとは大違いだ。

前で偉そうに勉強についてのみ語る校長の言葉を明季は正確に見極め、部分的に否定していた。

暇つぶし程度に自らの異論に上から塗り替えていると、塗り替えられた校長は明季にとって興味のある話題について論じてきた。

「今、当学校内にどのような問題があるのか知っていますか。問題は数多く存在しますが、その中でも今日皆さんに話す点は、最も真剣に取り上げるべき問題です。」

ある程度内容に興味を引かれる話し方に明季の視線も校長に吸い寄せられる。

「いじめについてです」

その端的な文に周りの雑声が一瞬途絶えた。

「当校のいじめの件数は具体的には断言しませんが、全国的に見ても多く、またそのどれもが大変深刻なものだといわれています。数

が多いだけでなく、悪質ないじめであり危険性も非常に高いのです」
後ろにかかっていた体重を前に戻し、体操座りで組んでいた腕を
組み直す。

「当校で過去に起こった悔やむべき二つの事例があります。皆さん
もこの二つの事例についてはご存知でしょう。我々教職員一同は二
度とこれに並ぶ事例をつくるまいと、心を込めて願います。過去に
起こったような命に関わる重大な損失を避けるべく我々は全力をも
って‘いじめ’という問題が大きくならぬよう励んでいくつもりで
す。いじめに良いものはありません。この学校の皆さんで全てのい
じめを排除していきましょう」

形だけなら良い論述だ。しかし、実際のところ一つとしていじめ
をなくすことができるだろうか。明季の短い人生経験の中には、い
じめをなくすことのできた例など刻まれていない。いじめをなくす
ことはそれほど簡易なことではない。全て、なんて論外だ。可能性
からいうと無理に近い。少なくとも教職員などに。

ねえ、知ってる？

そんな噂話が聞こえてきたのは、今日の朝礼の後だから余計に盛
り上がる話なのだろう。どうやら一歩前を歩いている女生徒が廊下
で話すのはいじめの話題のようだ。

三組の飯島くんつていじめられてるらしいよ。

誰それ、知らない。可哀想だねー。

ダルさを含む声に、横にいる紗耶子ほどではないが明季も驚き、
あやうく話に身を乗り出すところだった。

もう少しこの女生徒の話を聞きたい。そう思ったところで女たち
は自分の教室へと姿を消し去ってしまった。

「今の、聞いたよな」

「…うん。聞こえた。可哀想だよな」

二人を包む空気は明らかに気まずいものとなっていた。バツの悪そうな顔で可哀想、という紗耶子を見て明季は余計に居心地が悪くなる。

「戻ろうか」

言葉に詰まった後、切り出したのは明季の方だ。

頷いた紗耶子を見てから、予定を切り上げて足先を反対に向ける。

明季の頭の中は飯島への同情でいっぱいだった。

「あれ、もう戻ってきたの？早いな」

「いや、途中で引き返してきた。ちよつと具合悪くなつて」

「具合悪そうには見えないけど」

「身体の、とはいってないだろ」

教室に戻ると劉治はすぐに気配を察し、戻ってきた明季に声をかけた。

「お前らの具合は知らないけど用事の方はいいのか？」

「正直行きたくなかつたしな。藪さんだから多めに見てくれるだろう」

藪さんと呼ばれたのはクラス担任の藪川だ。昼の休み時間を利用して明季と紗耶子には藪川から命令を受けていた。

別段大した用事なわけではなく、単に英語の再テストの呼び出しである。小テストのようなものが毎週行われるのだが、五十点満点中四十点以下の生徒が再テストを強制される。そして、今回はテストの結果、明季と紗耶子が再受者となったということだろう。

しかし、明季にとってはこの結果が少し不信であった。確かに明季はテストに対して力を入れるでもなく、決して自分が合格したとはいえないような情けない出来となったのだが、劉治に負けたということが信じ難い。それに、毎回の小テストでは再試を受け直す者がクラスの半数近くいるのだ。明季と紗耶子の二名だけなんて今回が初だ。それが本当なら、クラス全体に大変な醜態を晒したことになる。

「そつえばさあ、何で二人だけ呼び出されたんだっけ」

「知らない。詳しいことは俺も訊かされてないんだよ。もし時間がなかったら他の日に回すからできればいいって藪さんはいったし、後で断つとくからいいよ」

敢えて再テストという言葉を出すことを避ける。仮定の話だが、仮に藪川の呼び出しの理由が再テストなどでなかった場合、そこで再受者の結果などに食い違いが生じるからだ。藪川が嘘をついても明季と紗耶子と呼び出すという保証も意向の根拠もなかったが、明季はおそらくそつちの線だろうと踏んでいた。

そついうことだったのか。

夕暮れ時だろうか窓の外が暗く染まっていく頃、職員室の黒紅のソファに座り正方形に近い白い机を挟んである男と面と向かい合っていた。明季の傍らには紗耶子が位置している。

休みを見計らって藪川と話ができなかった為、今日の放課後に居残りを命じられたのだ。

悲しいかな、明季らが所属する部活禁止組は通常の場合放課後に自主勉強などでどちらにせよ潰れる運命下にあるのでその要請を受け入れることは容易だ。

一つ返事で紗耶子とともに藪川の呼び出しを受けることになった。そして藪川は陽気な顔で黒紅のソファにどっかり座り、こう切り出した。

「うちのクラス委員やらないか」

再テストの関係など様々なものをすつ飛ばした台詞に、思わず情けない反応をしてしまった。

「……え、は？」

まあ、こうもなるだろう。理解に難を感じたのは、クラス委員を決めるという点だ。何を考えているのか分からない。すでに席の埋まっているクラス委員をどう決めようというのか、検討もつかない。もうすぐ十月に入る頃であり、現時点でクラス委員が決まっている

ことなどごく普通のことなのだが。

「あの、なんかいろいろな要因を含めてよくわかりませんが」

「そうくるのが普通だろう。むしろそう訊いてくれなかったらこの話をどう続けようかと悩むところだったよ」

「で、どういう経緯でそのようなオチに至ったんですか」

「オチとは失敬な。君の物言いは相変わらずだね、ねえ紗耶子くん」
「オチ、という言葉が気に障ったのか横にいた紗耶子に文句を振っている。」

「ええ、いつもこんなんですね。でも女子生徒にクン付けする先生も珍しいですよ」

「そりやどうも。ノリでよく使っちゃうんだよね、変？」

「話を進めて下さい。先生」

先生らしくない先生に敢えて先生を強調し、明季は先の見えない話の展開を求める。

すると、陽気な顔の口角を上げて藪川が本題にさつと戻した。

「おっと失礼。それでは本題に入ろうか」

陽気な顔は真剣にはならないが微妙に思いを入れていること空気感から自然に読み取った明季と紗耶子は表情を変えた。

「うちのクラスでは当初クラス委員にあまり事実上の役割はないとして、適当にクジを引いて委員を決めました。」

まずその時点で教師失格のような気がするが。

「しかしですね、それは私個人による訊き違いでありまして、なんと今年に限っては多種多様な行事で我がクラスのクラス委員には役割が振り当てられるんですと」

「訊き違いって何ですか」

「いや、なんかね、こっちが一生懸命会議中に隙間を見つけて居眠りしているというのに労いもせずになんかに大事なことを喋りやがって」

「それはあなたが百パーセント悪いですね」

「え？あれ、何で？」

分かっていながら首を愉快に傾げる藪川はやはり確実に先生向きではない。

「そこでだよ、明季くん。君と紗耶子ちゃんにクラス委員をやってもらいたいというわけだ。」

「あの、先生。今さり気なくチャン付け……」

「話が急すぎやしませんか？何故僕たちなんですか。第一、あなたが適当に行つたくじ引きでハズレを引き当てた現クラス委員の清水さんと山川くんはどうなるんですか。そこら辺の話は二人にはちゃんと通してあるんですか」

「もちろんだよ。清水さんと山田くんには断つた上での話だよ、今日は」

「山川です。いい加減にしないと怒りますよ」

本気めかした顔で明季が堂々と相手の目を睨むと藪川はあわあわと目を泳がせて弁解する。

「もう怒っているじゃないか明季くん。まあまあ、落ち着いて下さいよ。それに、二人にクラス委員を辞めるようお願いしたら清水さんは跳ね飛んで喜んだし、山田くんは『え？ああ、まあ、そういうことなら。僕なんかより適任はたくさんいますし。っていうか僕以外全員適任だと思えますし。僕なんかダメダメですし』的な感じでした承してくれたよ」

「山川です！」

「わ、分かった分かった、冗談じゃないか！。許してくれ」

怒つて席を立つた明季を、藪川は慌てて座らせる。そして悪身を帯びずに説明という形のただのお喋りを続けた。

「とにかくだ、明日から早速クラス委員として活動してくれないか」

「あの、それで先生。何で私たちなんでしょうか」

話を訊いたときからずっと疑問に思っていたのだらう、紗耶子がタイミングを見計らつて藪川に訊ねた。

「そこにはね、重大で明確な且つ絶対的な理由があるんだ」

「僕も気になりますね。なるだけ時間をかけずに教えて下さい」

「フッフ、知りたいか？どうしても」

「まあそうでしょうね。そこが分からなかったらクラス委員を引き受けませんし」

「そうか、そこまでいわれちゃ仕方ないな。教えてやろう」

待っている明季と紗耶子は固唾をのんだ。そしてその次に発された胸を張った威張り声に呆れる。

「面白いからだ」

「…はい？」

先に声を出したのは紗耶子だった。明季は呆れのあまりに声を出すことすら惜しく思ったのだ。

「君たちを見ていると面白いんだ。特に明季くんは面白い。一つ一つの言動が私にとつてとても興味深い。だから君にはクラスを中心となつて働いてもらいたい」

「お断りします」

藪川のいい加減な言い分を訊いてから、きっぱりと有無をいわせぬ表情で訴えた。そして意味を持たない押し問答が始まる。

このままずっと藪川の言い分を訊いていても明季は藪川のいうことを引き受けるつもりはなかった。しかし、形勢は意外な人物によつて変えられた。

「明季、やってみようよ」

そう発言したのは、これまで明季と藪川の口論にあまり口を出さなかった紗耶子だ。明季としてはここまで一向に口を開かなかつたのは紗耶子にとつてそれほど興味がなく、退屈しているくらいだろうと考えていた。

「もうちよつと考えようぜ。あまりにも唐突すぎじゃないか。十分やそこらで決める話じゃないと思うんだが」

「だけど、清水さんも山川くんも了承してくれたわけだし、今の現状としては私たち意外に引き受ける人はいないんでしょ」

「いや、決めつけるのはまだ早いだろう。クラスの中に訊けば、やっぱりやりたいって奴だつてきつと…」

「その点ならご心配なくー」

藪川が陽気に話に割り込む。

「クラスの皆にもちゃんと了承とつてあるよ」

「そこら辺の話を進めるのは早いんですね。ってか、そういうものは僕たちの了承を得てからクラス全体に訊くべきなんじゃありませんか！」

苛々が募る明季を、今度は藪川じゃなく紗耶子が窘める。

「ここで引き受けといたほうが何かと楽だよ。また始めみたいになら決まらなくて時間だけ過ぎてくよりはましでしょ」

「そのときはまったくでも引いて…」

「くじでクラス委員を決めるなんてそんなことは一教師として認めるわけにはいきません」

胸を張って威張っている藪川はもうこの際放っておくでしょう。

「お前、クラス委員やりたいのか？」

「やりたくはないけど、仕方なくって感じ」

「やりたくないのにやるってのは正解じゃないよ。やりたいならともかく」

「じゃあやりたい！」

明季が発言すると、すぐに紗耶子の言が飛んできた。

何かは知らないが、それだけ紗耶子の中には真剣な思いがあることを直感で感じ取る。

「…分かった。やりたいならな。あくまでもお前がやりたいなら、だ。引き受けよう」

「やったね、紗耶子ちゃん」

「あの、だからチャン付けはちょっと」

そんな言い合いをしている和やかな雰囲気、明季は遠目に快く伺っていた。

そんな最中、職員室のドアがトントン、と音をたてた。

「おや、早速来たようだね」

そういった藪川はドアの向こうを微笑ましく一人で見つめていた。

二章（後書き）

楽しんで頂けたでしょうか
次回も頑張りますので宜しくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3102w/>

黒く在り続ける夢

2011年11月15日05時42分発行